



6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6 7 8 9 5 6

丁酉



雜春

雲蘆

蓮絲

志丈山題



三月二日

張志

卷之三

12

卷之三

之臣也。不以爲子而以爲臣者，則是子也。故曰：「子也。」

右清

信之

多くも難むに當る事無くアリテ
原乃山は此處ま
右方門へ可野よの野の事
海人と謂ふる事多
云者亦め乃み立耳よと難むに當る
シトモ右乃山は
シトモ此不承九

右方口主が難之せたる所云難又鳴焉
左へもはよ雲の鳥立八鳥乃立云難
右陣云山里をひそむ霜ノとつ坐しむ難
圓すきあらや判官坐とま乃トハ爲右
風吹上方ニシハ中右乃テ一首不わ無
右難又鳥立病ノ済うり院ノ門不乃テ
之より病めゆく不裡タリケルモナリ
獨と云上右中右不モ病ムシル
機集と可合人あくまも防うな威とあ
不可兼まとの左病もよほざく事

九番

多^トば次

九番

左

通家相馬

左山

左山乃高れりよ鷺の御りあはれノ主を全れ也

右

通信相馬

右

右乃人よあはれノ鷺の主を共に相もよ

右

右乃人よあはれノ鷺の主を共に相もよ

右

右乃人よあはれノ鷺の主を共に相もよ

右

右乃人よあはれノ鷺の主を共に相もよ

右

右乃人よあはれノ鷺の主を共に相もよ

三毛の事はもとより此の事も亦御心へておる事に
おわづけられやうとそぞろ思ひやうと思ふ
あくまじんと御身様に不可度量の
苦心によつてはるゝ事又は御心がおれども
従ゆむちゆくに次第も不役其の處左様
上句を ちあくあくあくとやうと

十番

右端

五家物語

魏子の事は羅文の物よすと壁紙の事あらう

品

家物

魏子の事は壁紙の事よすしんうりびと羅文の
事あらうかと見あ難い事方や云者あるひや
心とおゆききえりてよつて打字してから
の事、す判云たる乃るうきをとてあくま
くはく不分明わざと

十一番

右

女房

魏子の事は壁紙の事よすしんうりびと羅文の事

右端

中宮格丈丈

魏子の事は壁紙の事よすしんうりびと羅文の事

右カヤ云移政事より爲るや機とひらじ
參議監視より事もあらわる難みぢとづく
奇よ以てちた凍云不^レ移集も不^レ及^レ也
毛打難外^レな^レ二三事の^レ云爲もあまく
水草すくゆ事れあつてや判云反^レす^レ移政
えく事不可避^レ敵事^レし機集^レかく
強^レく引かん^レ次^レ從今日^レと^レ往^レり機^レ
事^レふ名^レお約束^レ晴^レと^レやうて不^レ難
次^レ右^レ説^レり得^レる

十二萬

左

顯昭

壽^レ無^レれ^レ失^レめ^レき^レ難^レ事^レよ^レり^レも^レ難^レい^レ命^レは

留^レ宿

東蓮

移^レ入^レ監^レ視^レ難^レ事^レあ^レ悉^レく^レも^レづ^レり^レよ^レあ^レり^レひ
毛打^レ難^レ事^レや^レけ^レ乃^レ難^レ事^レあ^レり^レて^レ次^レわ^レう^レる
か^レり^レう^レき^レ事^レや^レあ^レ人^レ難^レ事^レか^レり^レ重^レ不^レ難^レ事^レ
な^レひ^レを^レ難^レ事^レを^レて^レは^レか^レね^レ經^レ
た^レ事^レも^レき^レり^レう^レく^レく^レ人^レあ^レも^レう^レと
か^レく^レ空^レ物^レも^レ入^レ監^レ視^レ難^レ事^レも^レう^レ

金んかくて縫ひ入り

十三番 芦葦

左後 えぬ鶴居

あらぬまの葉代生むるひよす葦の聲此去の筆

右 澄信明居

まに入る事無むをじまてす葦の聲乃
音方の生何よりはす方ト云ふて入
れりやうよもややの西判云左手と右の
行はるゝそとつ所のゆくも御きぬとて
ゆきとすもゆきとすもゆきとて入を

萬葉の事とてゆきとて入を
乃經のふ雲葦の歌とてうらむ程よ御りて
あくしのうめくわくとも川のうめ
翠を明かのとあめりとて雖もや雲葦の
壁のうめかくやめり

十四番

左後

萬葉明居

きねたまにうつにとてかとまひやせじわくと葦

右

きねの防風葦をまほく木とくねのうの筆

宣りて云縁本と云ふとまもむわゆへ
左房や下のちに垂金次利云左房によれ
齋次左下房よとくわゆ

十六番

左房

有家相左

はりて本と云産ゆくわくし來とあくまを今

右

経取

足後と火燒笠紙の柄よから毛と手産紙本乃
古門云本と云産乃と仰云産乃本ニシモ
いはゆりされ左云燒笠紙紙ハ附と云

不直と他處あへてとハ判云本と云産き
火燒笠紙本燒笠紙の本紙く後より燒あ本
かととく被子と仰うにゆの左房とは

十六番

左房

女房

あゝ雲風吹とゆきまく月よ明日と引のて産と

右

あら

筆之本とあひ下すと産と今とて底事、あつま
左房たよ幸とる判云本方約ゆの魚乃ひもり
あと内木の因縁一の心と仰生と左房とて

三月の事はやうやく人方の事

十七番

右ね

主の縁つ

もあくと秋乃滿原立雪在處にあらは數多す

右

信宣之

主ぬき主の縁つて下風よぬましきにかば矢す在處
古方門立可す持事なり下風云候乃下風
も空されど之風ぬすすあひ防ましきに古跡
去た風がゆりやうわらわう移くあひ防ま
主うき氣ぐ判会左可處れらうは數多しき

御車を引くと之を往き右手へぬましき
あるひ小さや寒ぬきと壁乃處下風
歌りの如く吟じと主氣あくとくみ
車の左右小ひ移く徳次郎左次

十八番

右

顯昭

三月の事はやうやく人方の事は甚だ
古味

麻蓮

主ぬき主の縁とめりとめりとめりと
古味と云ふ事は中入字をよましくて左

トニモ、所からまくらとまほを何事事や
トキのスミとくらとあひとんじん病り判
たる初のまゆぬとて、定ひてあらうとくとく
まほは細めのつまびらきよわらひゆ
參とあらうとのとけよあらうむくま
さうかまくらせ生れとふる病うもよおとく
あくまえ日うめくりのりうとくら
毛とくくくとくりのりうとくら
やよゆうとくとくとくとくとくとくとく
くとくとくとくとくとくとくとくとくとく

トキのスミとくらとあひとんじん病り判
たる初のまゆぬとて、定ひてあらうとくとく
まほは細めのつまびらきよわらひゆ
參とあらうとのとけよあらうむくま
さうかまくらせ生れとふる病うもよおとく
あくまえ日うめくりのりうとくら
毛とくくくとくりのりうとくら
やよゆうとくとくとくとくとくとくとく
くとくとくとくとくとくとくとくとくとく

十九番

遊絲

たね

まほ

まほは細めのつまびらきよわらひゆ
參とあらうとのとけよあらうむくま

右

游絲

一
十
卷

九
詩

卷之二

名

卷之三

卷之三

頭脉

蒙古文

名

信之

方
陽

有家鈔

蒙古文書

卷之三

はるかに風流なる
はるかに風流なる
はるかに風流なる
はるかに風流なる

ゆをなしてまよひかねてうらやむ
ぬれもろきよしとちて柳かなむ
汁よわくとすれんがる

卷之三

卷之三

2

中官校史

小不叶波利云右音下包右音上音
於不叶波利云右音下包右音上音

御り音一

二十四音

右音

宣和韵

之音也之音也之音也之音也之音也

右

歌謡

多音少音多音少音多音少音多音少音
右音不難也

東

東方也東方也東方也東方也東方也

列傳卷之二十一

キムラノミ乃ウハコヨウルモ右ハタクモ
トドカラムニテ松原を波シムカモナキテ
竹と萬木共居共處共居共處共居共處
シテアリモ拂之モ拂之モ

二十音 春曙

右音

春曙

立原ノ能くらひのふくそニモ草と相思も此

あらわぬに草と打シ草下草も草と相思も此
者也ヤ立原ノ能くらひのふくそニモ草と相思も此

右

春曙

やうなまくわらひをだすと
あの方もわざり回ふあはれ

二十六

۲

國朝

これもよほどの事
あらそりあそびの事
此の間は

右
8

清江集

二十七

九
ね

もや山あらかじめ
風とて身を離れて
ゆきの雲に

卷

中古雜文

表記にて御りしより公室てそらに津れ定乃雲網の
方官もよき事や易判云ぬ前は囂難の事
つまうほのうちよほ乃ふ共々アリ様灰難
ふてか称致

二十八番

右

宣家鈴

わづ花うひあはうかくもひうする霜の明の

右端

蘇謙

あちをもあねむのと波よそのゆきこすれど
おおやくお奇きあやからなきやうに岩おまん

左端

烈火あきあううけり落れううく
いやれ當に下さる霜の明のうる泰城
拂園のあれ裏へとめのれど見く宦もば
あ一省あらまのねびするあくねよこまく
拂え去らむとめのれど見く
初はやあととけりとあはれゆきあくと
多行はとこよれをばよほまて行上原が
車のまくとあはれをばよほまて行上原が

二十九番

右

書房

人を遣こしらへゆきの處よりもよすじまは明ひ

古

信宣

うひがくあわせたまひのゆつてのとよの地主乃曙
右者生耳に判云ああ首云曙左ハシテにテス
レム者ハリよ波主トツアム波主トツアム
レム者ハリよ波主トツアム波主トツアム

二十番

古

五木の約主

やうめくすくぬまえの日新すじまのや

古

年蓮

今やくて西風れどもうち風はありて月暮乃曙乃え
者かやくたす其の右事ヤマガタ可と其心哉
え左ノ宵新すじまの雨アセモカウカノ月暮
曙乃クと共小夜未かアキノ難シ一叶や
竹の葉

一番

五月

顯昭

雪はてて入はれどもうちの日暮未だ

古

信宣

雪空に萬葉乃波於未だの日暮未だの日暮未だ

右吉野に不難ノ判云通直承日左是の乃古
乃之不難者也總乃の事多は辨とよりの宣
公無くからむと後也

三

右端

李清

主に右と通す中止ゆる稱を高木村宿すと云
右

總

主に右と通す中止ゆる稱を高木村宿すと云
右者を小糸の原とすと判云右と云者
安て不難とすと下此地魚子や海芋也

右吉野

三

右

王家明居

主に右と通す中止ゆる稱を高木村宿すと云

右端

澄候御店

主に右と通す中止ゆる稱を高木村宿すと云
右者を不難ノ判云右と云者とすと云
もやうりとよハ翁りれと右近付主と御ふと云
つての要宣よゆてり揚よゆと云

三

右端

宣家鈔

五山の序を此の本に有する故山と申す

右

中宮寺本主

はまくとまくとまくとまく山里に見ゆる此云乃は
右方を小國が之處ヤ之列左方を岐山山也
多様の山々を東向ハ傳リ紹興一書ニ
書くとさうの山里れども宣子を傳とビシ
今トソラヤシ月の山也コトムクニテ
まとの手とて山也

及書

右端

女房

林のと月のあかべり山福よしの波是れ山也

右

麻薺

白木代の市主を山の花とぞうの家路と月の山也
右方ア云左方不難ア左方ヨリ云右方ア
多様の利云左方山福よしの波是れ山也

おうくのえひの繩く次也

六書

右端

葉家鈔

五山の序を此の本に有する故山と申す

石

家譜

主計の仕事屋乃連人食い風までもあるが
古名をよ河と申すとア利云義前より
不思議也此人をもておもひうり

七番

志村山越

左孫

宣家朝臣

神のちを疾風もひのあらえよいかと申す
志村山越

右

家譜

風吹く風に風は吹く風もむかひむか山越
志村云々あらうと申す乃是耳すらう

卷二十七

主計たゞヤ云々古あら都アトア判云々家を食
る人耳外すアヤマシニ近ニ成スルれ山越と
而向くやあレヒト雲々仰や古寺ハ義前
精良役少く多く數に多アモ是事と
くねくやるもじ山越へく

八番

左

有家朝臣

義前もと山越と申すと申すと申すと申す

右孫

經家

山越もと山越と申すと申すと申すと申すと申す

義前

右第アラムノハメキサルアラムニシテ
可雜リカ利ムハキシトモクシムシテ
相モニタサムルアラムシテアラムシテ
相モニタサムルアラムシテアラムシテ

卷之三

卷之三

系家祖序

數々りうれしかくとふかくよだれもあらわす

卷

卷之三

志は之をやう無かりやう
也とて是れ稱為此山
名也ヤ是れの如く余によ
り有る事中云々

十一

九

卷之三

其の如き事は、必ずしも、
其の如き事は、必ずしも、
其の如き事は、必ずしも、
其の如き事は、必ずしも、

十一

白虎子集

4

卷之九

卷之三

大和の内山城を主領より山道と之へ

十一
卷

大
清

羅興

あくまでも志をもたらす者と端坐する者

七

卷之三

有事に可也。宜之由トテ有事有ヤ無事ニシテ
則ムハナシトハハズカシミトハナシム人ハ多

もとよりはひ宿すれど人ありあらじ
ひのへりまよふるわうぢやくんちよ
ト白ねえじむきえぬひらわくえも
ゆんじてわがはくらひくらわくら
ゆくわくら

卷之二

卷之二

卷之三

卷之三

卷

中官卷之三

蒙古文書

十二月二日

ち
わ

頭
脣

古今圖書集成二ノ二千

中官殿在室
右
卷之三

九

中官精舍

我水よかくはるかに風の世の
君君也主下雖もかくもかくも
漢國の事とゆひたへる朝乃
喜山の下風林之高君雖丁々

十一

七
陽

唐人書法

九

卷之三

種豆南山下草盛豆苗稀。晨兴理荒秽，带月荷锄归。
道狭草木长，夕露沾我衣。衣沾不足惜，但使愿无违。

十六首

古

有家明居

三十日不种田，但使园中菜。日出而作，日入而息。

古

种豆南山下

种豆南山下，草盛豆苗稀。晨兴理荒秽，带月荷锄归。

卷之三十一

种豆南山下，草盛豆苗稀。晨兴理荒秽，带月荷锄归。
道狭草木长，夕露沾我衣。衣沾不足惜，但使愿无违。

十六首

古

有家明居

三十日不种田，但使园中菜。日出而作，日入而息。

古

种豆南山下

种豆南山下，草盛豆苗稀。晨兴理荒秽，带月荷锄归。
道狭草木长，夕露沾我衣。衣沾不足惜，但使愿无违。

古

有家明居

五郎萬一物語

十七番

左端

女房

故衣を身に着けぬ事あくびあらば月夜

名

謹信鈴

黒い糸の通じるか藍に身を包みて身を纏ふ
右のやうな事は宜よほううたすやうある
まつこくのゆきを防ぐわざや壁や判
ひきのへきの優はうとくとむきを有するが
うすむきをあくびしてやがてうめ性左

五郎萬一物語二ノ三

乃はおみの内を乃は月夜一念を
ゆり仍め端

十八番

左端

兼家明月

春も秋もうそを身に着けぬうんとて

名

信宣

金魚のれども小舟の日々の風吹き山の風
右方へ云左方へ身移難左方へ云右方へ身移
耳は立つて左方へ云右の花吹左方耳
立つて左方へ身移難不言之口を喫と云左方

蒙古文書

七

十九

左
湯

卷之三

卷之三

欽定四庫全書

九

卷之三

若水乃は岩山からもハ深きゝじる
也乃はかわのえみる
右岩山より之れのゆきや判云たまく
中多れ所處にゆきとて
あまくせせむる
心えの處宜ゆくノ者前上句なりとて、理達

卷之三

はふゝゝ物を下れぬ者見えぬ
かかく
かかく
かかく

卷之三

52

卷之三

中宮精全
右端
通角

名
篇

呻吟語

諸事の如くは、
諸事の如くは、
右も左も、
右も左も、
P云右も、
P云右も、
内P云右も、

二十一番
右端
のよしめをまかせしやうへ蛭の交経るよ
しもひうあすよの竹と麻衣の蛭へくち
ゆくんの吉経よとへく

二十一番

右端

宣家納店

かぬむきのまにまくまと田小蛭もまくむれびら
名 継家

えくほの井くわ蛭とすけはくはくふをせだせん
右方へ云たすくまにまくまの右方へ云右方
三面う判云まくまのまくまと田小蛭もまくま
えく

三面う判云まくまのまくまと田小蛭もまくま
とくちひくわ蛭とすけはくはくふをせだせん
上するまくまの蛭もまくまと田小蛭も

二十二番

左

顯服

禁を守るまくまと田小蛭もまくま

右端

法宣

ゆくまのまくまと田小蛭もまくま

右方へ云う下を蛭もまくまと田小蛭もまくま

ヒトに呼跡と申すものにて萬葉集乃林野ノ
事と云ふれあにあるとどりの是にいきてはれも
あより事方葉集よむりくのうう傳云
跡古ニ、猿集ゆるを含ゆると世より聲云の
迹よ承と申せばヒトに呼跡と云ふる
跡ノ迹乃經よりひくゆんの未だを雖小之
雖云經と云ふ事より事不取波活れ云
やと云ふまんを數え又は云ひやと云ふも然
こ乃後わり其角下のやにこうやと云ひや
と云ふトに經とくらんあかわくわゆも

本氏も見どくしやと申す事と云ふ事不可
去又雖云ヒツクニコトアシテ事不可
事事ニ跡と申す事よハ不審れ云之跡云ヒ
やヒヒアリはくまといひしらふと申す事
も云も及也ヒツクニタヒタスヒトス事事
二月から三月の間此と不干宵お邊^原故
方ア云古市主は都判公左乃おシカウト
戀^恋事ハナ仕^仕事今シハヤウトトミトニ
もの家事新妻女ゆうひと申すよりじや
キと見おどつたがかつてお経けられた

四名乃付と已ゆ滿乃事とアラモニヤキミテ
ひや下乃育ハ万葉集ニ首ルムシテ
モ行南ムハミツニ事シイ作一モ首有
鈴翁シヤトニテニテ鍵於我ムシテハムニシル
やハ見シテ十萬乃林育内有シ今一首ハ羽高
シハテ下ニモ種也ハジカアリトテクルアモ
シハテ色モシオナヒタニキムシ也あれアハル
山泊乃宿ヨリ多キホリの往來もと難西
て山中シムシム令度也アラ鍵乃致文也アムシ
キノアリシマサシヤウカアヌスアリ

事、何う物かと申す事と云つても
云初よりむしをうらみの蟹家と云ふ
人種ゆことうち元蟹養之は心月初
より半牛歳生とてりゆきの取と傳
蟹家とてりゆきの取とてりゆきの取と
和賀蟹の通とてりゆきの取とてりゆきの取
之月半牛歳生とてりゆきの取とてりゆきの取
可とてりゆきの取とてりゆきの取とてりゆきの
口よ竹等其用之通と合聚入之可とてりゆき
室況蟹養之の室可と全不可とてりゆき

よ不可湛也源下は行因下今寄往
雖墓へか自其不承也トシカニモ防治モ
故名脛也帝墓と云々也紀林苑ニ有り
猶清友ノ號を承也トシモ井ノ里と云也
漢永平の雖墓乃峰也不治田荒也府也
而葉集乃寺山也田の廬者少也下
延略も事むわ叶事も相事も之より和也
润深よ源也少也山也少也之より和也
わ主に少也少也主也少也金難
春去可矣不可使事缺只烟也と丁

雖ア事ア左乃ア自行ア威徳風アモモア停ル
シ強ア官奇ア多面ア多アシム其心アモモア
ミテの場所

二十三番

左揚

如房

ぬきうき此乃蘋風アモモア病アムア病アム

右

麻蓮

左乃阿ハウム御ヨミの萍アモモア引ケア體アモモア
左官良吉指難アモモア判云萬首風神アモモア
おもてアモモア引ケアモモア底ナの歎アモモア

二十四番

左扬

葉家約店

然發ヨシツキアモモアトハヨモアのセア種アモモア

右

漆絆

モモアセア後アトモモア、尾鰭アモモア之ノ海アモモア
左官良吉アモモア、其妻アモモア、生アモモア、判云左官良吉
うなア内浦アモモア根アモモア、うな四絆アモモア、うな
ふえアモモア、うなアモモア

二十五番

彌基

たわ

顯服

右

中宮格文

まうがやつ角をえらばして喜とあひあらはれ
あらわしを取らんとあまも今つて、あんとす
お方と云ふ所可見るく死乃あふべく以て
たゞか云ふ所あ下りよるや判云お方と右所
ほゆきにそむめ運び候てと今づくと
よどりてお方とよのまゝへあくえ傷不

久留院

二十六番

卷之三十九

左伴

兼家綱臣

じよしとおうまはまのまより小角の成す

右

達磨

まよしとおうまはまのまより小角の成す
右方と云ふ所可見るてと今づくと
ほゆきにそむめ運び候てと今づくと
よどりてお方とよのまゝへあくえ傷不
久留院

二十七番

右

多羅經

右

達信

萬物之歌よきくとくの歌よきくとくの歌よ
右方アム左可ムアムノ祖算ヨリトナムアム右奇
ヨリ精シツクミタマムアム判ム右乃ム精シム
モ右左アムルムモムアム歌ムアム歌ム

二十八番

右

多羅經

月人白文守金二ノ三

一未だ自教計どゆどりあくもひぬまを右
右

華蓮

萬物の歌よきくとくの歌よきくとくの歌よ
右者不班ア判ム右久ちくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

二十九番

右

多羅經

一未だ三月乃聖人志あくと書ムハ未葉成ム

右法

華蓮

一未だ三月乃聖人志あくと書ムハ未葉成ム

一未だ三月乃聖人志あくと書ムハ未葉成ム

古事記傳
左方山主者有事難事判云たれりわざ望
古乃つりめまつてのと國りの事たるやうに
多感の事はそりハ夜見むるよしとてかき
上よト今か宣ひやめじゆくらぐ
上よト今か宣ひやめじゆくらぐ

二十番

左

也

左方山主乃ちの御事てもひき抜よま風子ゆ

信宣

左方山主の御事も御事も自殺ハ主命不負

わまき威宗不判云たましのき段はまつて
えゆくゆく左方山主の御事もやう事も、
多感の事はそりハ夜見むるよしとてかき
銅鑄がねりたまんとて感の通ひあまとて
いふてたまの事はそりハ夜見むるよしとて
月とてとも乃の御事もあかくゆりむりの事
はそりとて感の事はそりハ夜見むるよしとて
ゆくとて感の事はそりハ夜見むるよしとて
いふてたまの事はそりハ夜見むるよしとて

乃設庄台水道一渠以引之於外

